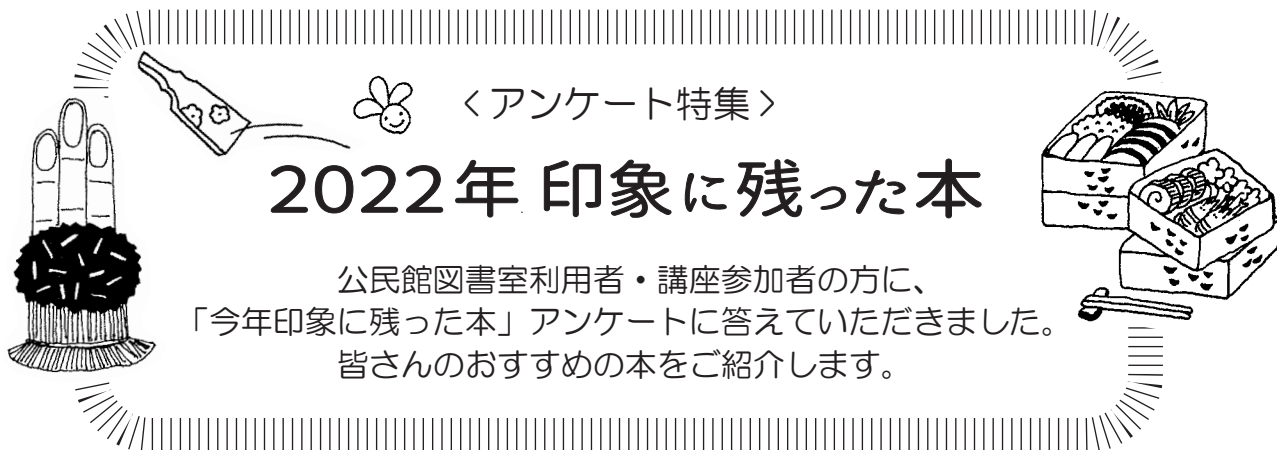


図書室月報

2023年(令和5年)1月5日

第716号



公民館図書室利用者・講座参加者の方に、
「今年印象に残った本」アンケートに答えていただきました。
皆さんのおすすめの本をご紹介します。

仕事をしていた時に、三回ほど裁判にかかわったことがあり、裁判所にも何度か行ったこ



『裁判官のつばやき』
門口正人(法曹会)
宮武 光吉

ここに私の好きな寂聴俳句の一句を捧げる。
冬紅葉分け入れば山なほ深く

『奇縁まんだらシリーズ 全四巻』
瀬戸内寂聴(日本経済出版)
関 美智子

この本は、著者が生前出逢った文豪や芸術家たちとの出逢いのエピソードを綴った交友録である。そしてエンターテイメント性の高い作品でもある。著者の人物観察力と記憶力が遺憾なく発揮され、その人物描写は素晴らしい。そして横尾忠則氏のカラー挿画と相俟って読者をしての世界へと誘う。今年瀬戸内寂聴生誕記念日に是非一読してほしい。

『ザリガニ……』は、米国でベストセラーになり、昨年末映画が日本でも公開された。10歳に満たないで一人ぼっちになった少女が沼地でたくましく生きていく成長物語であり、ミステリーとしても読ませる。作者は、アフリカで長く研究生活をした文化人類学者で自然の描写が優れている。『若冲』は実像とは



『ザリガニの鳴くとこ』
デイリーリア・オーエンズ
(早川書房)
渡辺淳一(講談社)
岡野 正義

とはあったが、裁判官と面と向って話をしたことはなかった。興味を持って読みました。本から、謙虚で真面目、ユーモラスな筆者の人物が伺えました。その後「図書室のつどい」で、ご本人の話を聞いて、その感を強くしました。「裁判、裁判官、裁判所のなぞ」を、元裁判官から直接聞いたのは、又とない貴重な経験でした。

異なる設定をして、若冲に迫る作者の心意気に惹かれる。『阿寒……』渡辺淳一の初期の作品は素晴らしいと聞く。苦き自伝小説。

『カキフライが無いなら 来なかった』
せきしろ 又吉直樹(幻冬舎)
入山 頌

虚しさや痛みにもニコニコしている。と忘れそうになるが、言葉は、暮らしている言葉ほど、私やあなたの世界を彩る。本書より一句。——ひげ剃りにも負けず——本当にその通りである。その通り以外の感想は野暮というものである。SNSは社長の気分次第でどうにでもなり、共感のインフルエンサーだのが砂に還る今日、昨日の安い自分を嘲りながら、自由律俳句は、もう一歩だけ、前に進む勇気を与える。





『今日からはじめの養生学』

伊藤和憲
(インターナショナル新書)
深見 弘

養生は単なる健康法というより生き方そのものです。本書には、季節の移り変わりと人体の養生法が書かれていて日々の生活の参考になります。

新型コロナで我々の健康観は大きく変わりました。病気になってみずには入院できないという現実を突きつけられ、ウイルスに感染しないよう自分の身体は自分で守らなければならぬと考えるざるを得なくなりました。自分の身体が発する声に耳を傾け、季節に応じた生き方をして病気にからないようにする「養生」の考えが必要と論じてくれる本です。

『暗殺者の回想上・下』

マーク・グリーンニー
(ハヤカワ文庫)
新田 雅司



暗殺者グレイマンシリーズの第11作。ジェイソン・ボーンのようなジェントリが「誕生」した12年前のアフガニスタン作戦と、そこで死亡したと思われて現在、インドでのテロを企むパキスタン情報局元少佐との因縁の対決。両プロットが同時進行で描かれ、12年前はヘリコプターでの追撃、現在はサイクロンの暴風雨中での高層ビルでの直接対決と、ここまできたら、

映画化は絶対不可能な大アクション。ルーツを探る必読の1冊。

『かもめ』評釈』

池田健太郎 (中公文庫)
鍛冶 勝

チェーホフの戯曲「かもめ」の、マニユアル本。一つ一つの

台詞、シークエンスにこだわり、時々刻々の作品の流れにそって、登場人物のウソと誠を一問一答形式で、静かにあぶりだす。

必要な台詞は、すべて掲載されている。芝居未見、作品未読の者にも、「かもめ」の急所が、もれなくつかめる配慮が心憎い。

これ一冊で、芝居の目が肥える。人に無理なく教えられる。帝劇、宝塚等の観劇料のモトがとれる。芸術選奨文部大臣新人賞受賞作。

『あの胸が』

岬のよつこに遠かった
〜河野裕子との青春〜
永田和弘 (新潮社)
大井 利雄



夫婦はともに歌人で、歌会始めの選者もつとめた。裕子さんは戦後生まれ初の角川短歌賞を受賞、与謝野晶子に比する情熱の歌人であった。がんで64才でなくなったが、死後まとめた最終歌集『蟬声』とあわせて、死の前日まで歌に託した思いのたけに涙する。妻が遺した日記と手紙で綴られ、愛するひとを失い、輝く自分も失ったと痛切に

感じ次のように述懐する。

「覚えている人がいる限り(亡き人は)生きているんだという気がしますね。河野を生かしておくためにも、長生きしないとダメだと思う」「わたくしは死んではいけないわたくしが死ぬときあなたがほんたうに死ぬ」「しつかりと大切な人の死に付き合うことが大事。それで自分なりの受けとめかたができるのではないか」(朝日新聞2020年11月21日)

河野裕子 絶世の歌「手をのべてあなたとあなたに触れたときに息が足りないこの世の息が」

『アダム・スミスの』

夕食を作ったのは誰か? ;
これからの経済と女性の話
カトリーン・マルサル
高橋璃子訳 (河出書房新社)
中井 あつし

リーマンショックが起きた時、当時のフランスの財務大臣ラガルド氏は「もしもリーマンブラザーズがリーマンシスターズだったなら、あのような形の金融危機は起こらなかったはずだ」と冗談半分に言ったとか。

「アダム・スミスの『国富論』以来経済学は女性を閉め出してきたが、彼が夕食を食べられたのは「見えざる手」によるのではなく、彼のお母さん(彼は生涯独身だった)が毎晩せっせと料理を作ってくれたからなのだ。

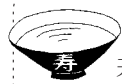
『サ』エンス全史(上・下)』

ユヴァル・ノア・ハラリ
(河出書房新社)
猪原 康一郎



或る人が最も感銘を受けた書として挙げていたのを見て改めて手に取った。発祥原初から今日迄、人類の歴史を検証する。認知革命→農業革命→科学革命と知的進化、世界進歩した。キーは虚構(想像力)。ところが、本書の最後は幸福論に行きつく。人類は本当に幸せを目指して来たのか? そして人類種か? と著者は問う。千年後? どうだっという、と云わず一度想いを巡らしてみるのもいいのではないのでしょうか。

『あちらにいる鬼』



井上荒野 (朝日文庫)
東 健太郎

傑作。不倫を描いて清潔さを
感じさせる希有な小説。

モデルは井上光晴、その妻郁
子、瀬戸内寂聴で、娘の荒野か
ら見た「真実」を描いている。

愛人の「みはる」と、妻の「笹
子」の視点を交互に出してくる
という構成が秀逸。

不倫された妻と相手の女同士
が、同じ一人の男を愛した女と
して共感し、連帯するような関
係が描かれていることに驚きと
共に感動を覚える。

小説家の父が小説家の女と不
倫の関係になり、小説を書いた
こともある母の気持ちをも小説家
の娘が描くという世にも稀な作
品だと思うが、対象者への作者
のリスベクトにより、本作は通
俗を遙かに超えた高みに達して
いる。



『おやつが好き』



お土産つき』
坂木司 (文春文庫)
上野 千晴

思わずにんまりと頬が緩んで
しまう、みんな大好き、おやつ。
銀座界隈のお店などのお菓子や
デザートを紹介したエッセイ。
一項目ごとに一店舗を取り上げ
ている。

「パリッ、シャクッ」口に含
んだ食感を大変豊かに表現され
ていて、音も香りも溢れ伝わっ
てくるようだ。おなかと心を満
たしてくれるオイシイ一冊。
さて、今日のおやつは何かし
ら?と、一日一項目ずつ、心の
おやつとして読み進めるなんて
楽しみ方もよいだろう。

『目の見えない白鳥さんと
アートを見に行く』

川内有緒
高遠 敬子

(集英社インターナショナル)
このタイトル、いったいどう
いう意味!? 盲の方がどうやっ

て絵画を楽しめるの!?!
その疑問は、講演会で初めて
白鳥さんと著者の有緒さんを見
て、理解した。

一緒に同行する人が、白鳥さ
んに「この絵は……です。真ん
中にバラがあります。」と見た
ことを伝えるのだが、その人の
感性がどんどん開花し、気付く
と白鳥さんではなく、見える人
が本当のアートに触れることにな
る、驚くべき本!! すごいで
す。とっても感動しました。

『饗宴』

—世界の名著6
「プラトーン」
プラトーン (中央公論社)
武内 法行

プラトンの著作は、ほとんど
が対話形式で書かれているので
二千四百年も前のものなのに、
ソクラテスをはじめ当時の知識
人の声や意見を真近で聴くよう
である。エロース(愛)につい
てのこの作品は、とりわけイタ
リア・ルネサンスの文人や芸術
家に影響を与え、その活動の推
進力となったようだ。人間の能
力が最も輝いていた時代—古代

ギリシアやルネサンスに関心
を持つ者には、必読の書かと思
う。

『夢のかけ橋』



永畑道子 (新評論社)
向井 誠一

有島武郎の波多野秋子との情
死は短かった大正史に妖し気な
光を添えている。本書は事の経
緯とその後を当時の関係者への
取材を交えて綴ったものである。
読んでみて何よりの収穫は秋子
の夫、波多野春房の素顔が写真
を通し拝見出来た事である。

仲々の男前ながら偏執的部分
も窺い知れる風貌であった。そ
の後、彼は後添いを得、日本海
側の街へ移り住んだ。取材当時
その家は残されており、存命で
あった後添いの方が住まわれて
いた。書齋に使われていた二階
の部屋の机には秋子の遺影が飾
られていたが、最後迄彼は後添
いの方の入籍を許さなかったと
いう。喪失感の大きさが窺え知
れよう。同時に、苦勞を知らず
に育った「お坊ちやま」に靡い

てしまった秋子をさぞや忌々し
い思いで眺めていたのであるう。

『事件当夜は雨』

ヒラリー・ウオー
(創元推理文庫)
大山 葉子

あまりにも有名なので今さら
紹介でもないが、今回の復刊で
読む事が出来た。宮部みゆき氏
もお気に入りの古典小説。

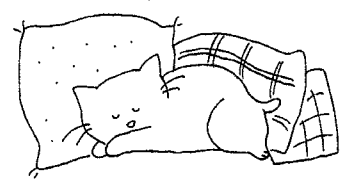
ここにはホームズもポワロも
存在しない。地味である。しか
しその地味さがむしろ美点で飽
きの来ない理由ともなってい
る。幾度も行き詰まりながら地
道な捜査の積み重ねで、アリバ
イを突き崩していく。その手法
にスキがない。動機に至るま
で、挫折しかりながらも最後
まで諦めず究明する。警察小説
にあまり興味のない方にもお薦
め出来る一冊。



ブッククラブから

奥泉光著 『東京自叙伝』
―なるようにしかならぬ不思議な都市、東京

岡本 修治



読みにくい小説だった。講談のごとく次から次に話が展開して忙しかった。作者が思う存分好き勝手に面白く書いている、とても変な小説のように感じた。しかし、私はただただこの小説の持つエネルギーの総量には圧倒された。《地霊》が東京にいるというのを想定して話を組み立てている。登場人物すべてが、主人公の東京なので、例えば、自分が自分を殺しているのを自分が見ているシーンなどもでてくる。だから、とても不思議感がつきまとう。

構成的には短い章のタイトルが、あたかも順繰りの「あらずじ」のようになっていく。これは作者の読者に対するサービスタと想った。手前の章は次の章へ「リレー」されていくのが最後までずっと続いていく構造になっている。「連結」構造と言うより「ループ」構造と云っていいのかもしれない。だから何度も主人公が消えては再登場する。

戦後の闇市とか、博徒、テキヤ、不良学生、愚連隊の喧嘩のシーンは昔のアクション映画を見ているようだったし、東京が東京として急成長した高度経済成長の時代あたりでは、テレビが登場して天皇の結婚(皇太子)、街角のテレビ観戦、東京オリピック、安保闘争、ビートルズ来日、三島由紀夫の自殺、山一証券の倒産、

等のバブルが弾けるまでのところは絵巻物のようだった。エコノミック・アニマルといわれジャパン・アズ・ナンバーワンといわれ経済発展を追い求めた日本。バブルがやってきて、そしてはじけて、元の木阿弥となった。各章が「柿崎幸緒・榊春彦・曾根大吾・友成光宏・戸部みどり・郷原聖士」というキーパーソンによるリレー方式になっている。最初、私には意味がよくわからなかったが、「全部が同じ私なのだから」というくぐりだり、理解ができたような気になる。具体的に、名前が書いてあるけれど、主役は全て「東京」という怪物。かりそめにそうした人物の名を借りて語り継いでいるような感じにしている。そして時代とともに傲慢になっていく東京。

そこから必然的にある人格が産み落とされる。ネットの中に拡散している、あまたいる人間は実はすべて自分なのだ。ネットを構成する顔の見えない存在のひとつひとつに、「東京」の自分の一部が投影されているとでも、言っているようにも感じる。それは「東京人はことごとく我なり」との結論めいた言葉もあった。その象徴として作者が提出したのが秋葉原の殺人事件の犯人だった。無差別殺人のこの犯人は実は自分なのだ。「東京」が告白する。

最後の最後は「東京湾に夕暮れが迫り、浜風が吹き

寄せるなか、瓦礫の陰から赤く染まった空を見上げる一匹の鼠、たとえばソナナものがいたとしたら、それは私です。」で終わっている。

現代に警鐘をならす作品なのだろう。東京を通じて、象徴的に現代を見ている。「なるようにしかならぬ」だから、今あるようにある東京。こうとしか言いようのない諦観に満たされている。そんな東京の歴史を通じて現代を憂いながらもその向こうに東京の強靭さと作者の東京愛も感じさせてくれる小説だった。

(集英社文庫)

くにたちブッククラブ

―感傷から遠く離れて―
松田青子『女が死ぬ』

(中公文庫)

講 師 おだいら まいこ
小平 麻衣子
(慶應義塾大学・日本近代文学)

と き 1月12日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 地下ホール

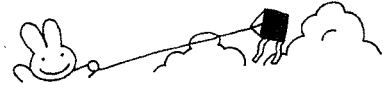
申込先 公民館 ☎(572)5141

*今年度のブッククラブは
今回が最終回です。





講座参考図書



くにたち野鳥観察

講師 佐伯元行 (国立あおいとり保育園 園長)、中島徹也 (くにたち野鳥観察会)

- *鳥の羽ばたき 佐伯元行
- *身近な野鳥観察ガイド 戸塚学 (文一総合出版)
- *鳥のフィールドサイン観察ガイド 箕輪義隆 (文一総合出版)
- *多摩川の野鳥 津戸英守 (講談社)
- *歌う鳥のキモチ 石塚徹 (山と溪谷社)



〈多文化共生講座・写真展〉

魅惑の南インド —文化と儀式と人々と—

講師 河本憲治 (元インド駐在員)



講座の詳細は
公民館だよりを
ご覧ください。

- *ときめきの地、魅惑の南インド—写真集・エッセイ集 河本憲治
- *河本憲治写真集—魅惑の南インド 出会いとふれあいと 河本憲治
- *インドを旅する55章 宮本久義編著 (明石書店)
- *多文化共生のコミュニケーション 徳井厚子 (アルク)

突然ですが、皆さんは本を読むとき、何がきっかけで選んでいますか。私がこの小説を読もうと思ったのは、タイトルが気になったからです。リリースというタイトルから、内容を想像することができませんでした。そのため、内容が気になって読むことになりました。せっかくなので「リリース」の意味を検索して調べてみました。すると、「抑えてきた状態

から解放放すこと。」と出てきました。私を知っているリリースの意味と同じでした。単語によっては複数の意味がある場合もあるので、何か特別な意味があるのかとも思いましたが、そういうわけでもないようです。読んだ後に確認として意味を調べたのですが、確かにリリースというタイトルは、小説の内容にぴったりです。

この小説は、悩んでいることがある人におすすめの一冊です。意外と周りの誰かの一声で環境はがらりと変わったたりします。そんな風に思わせてくれるのが『リリース』です。

〈私の本棚から 第4回〉

草野たき著
『リリース』

吉沢いより




公民館図書室 休室のお知らせ



蔵書点検のため、休室します。
ご理解とご協力をお願いします。

休室期間
1月31日(火)～2月2日(木)まで

※新聞は、休館日の月曜を除き
朝9時から夕方5時までの間
2階事務室前で閲覧できます。



(ポプラ社)